

いじめの予防に関する一考察
～パーソナリティと家族機能の関連性から～

人間教育専攻
幼年発達支援コース
三井 理愛

指導教員 田村 隆宏

1. 問題の所在と目的

近年のいじめは、携帯電話やインターネットなどの電子器機を使用した「ネットいじめ」と呼ばれるような陰湿かつ高度ないじめの手口が問題視されることなど、いじめは現代もその質を変化させながら、学校や子どもたちを取り巻く教育環境の中に蔓延していることが明らかである。さらにそれらのいじめを苦に自殺する子どもも少なくはなく、教育に携わる者たち全てにいじめの早期発見、早期対応が求められている。

いじめの起こるメカニズムとして森田(1998)は、いじめっ子・いじめられっ子、周りで面白がって見ている子(観衆)・見て見ぬふりをする子(傍観者・うち仲裁者を含む)という4層構造のなかで発生していると指摘する。さらに4層に当てはまる子らには、それぞれに性格的特徴があると指摘している。また清永(1998)は、これら4層構造の背景には、核家族化・情報化・都市化・学校化の4つの社会的状況が関わっている中でも、現代の家庭環境の在り方は、いじめに関連する心理の基盤が育つ環境であると述べている。

これらのことから、いじめには個人が持っている性格特性と、家庭環境の在り方が大きく関わっていると考えられる。そこで本研究は、いじめっ子・いじめられっ子・観衆・傍観者の性格特性に注目し、それぞれのいじめに関わる人

たちが、どのような性格特性を持っている者が多いのかに焦点を当てると共に、それぞれの家庭環境や家族機能はどのような働きを示しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

調査対象：徳島県と香川県の専門学校・大学・大学院に通う学生214名(男子61名、女子153名)。

調査期間：平成21年5月～6月

実施方法：質問紙法(回顧法)。

有効回答数：201名。有効回答率：94%

調査内容：

①個人のいじめについての意識をはかるために、森田(1986)が提唱するいじめの4層構造モデルや、Barbara Coloroso(2006)らが提唱している4層の特性を項目化し、それぞれに質問を設けた。全24項目に対し5件法で回答を求めた。

②個人の性格特性をはかるために、東京大学医学部心療内科TEG研究会らによる「新版TEGテスト」を用い、全55項目に対し3件法で回答を求めた。

③家族の在り方について検討するため、草田ら(1993)による「家族機能測定尺度」を用い、全20項目に対し5件法で回答を求めた。

3. 本研究のまとめ

本研究の結果から得られたことは以下の各3視点であった。

1. いじめっ子の性格特性と家庭環境について

①いじめっ子の性格特性には、他人に対して批判的な態度が強い者、機械的で冷淡・打算的な態度が強い者、わがままで自己中心的な態度が強い者が多いということ。②家族機能の凝集性については、家族との情緒的繋がりが全体的にやや高い家庭が多いということ。③家族機能の適応性については、家族の危機や発達の危機があった場合、家族システムや役割関係を変化させることに優れている家庭が多いということ。

2. いじめられっ子の性格特性と家庭環境について

①いじめられっ子の性格特性には、過保護でおせっかいな態度が強い者、消極的で他人の目を気にする態度の者が多く、他人に批判的な態度が強い者、打算的で計画性が強い者、自己中心的でわがままな態度が強い者は少ないということ。②家族機能の凝集性については、家族との情緒的繋がりが全体的にやや高い家庭が多いということ。③家族機能の適応性については、家族の危機や発達の危機があった場合、家族システムや役割関係を変化させることには特に他と比べて優劣の変化がないということ。

3. 観衆の性格特性と家庭環境について

①観衆の性格特性には、消極的で他人の目を気にする者が多く、他人に対して批判的な態度の強い者、打算的で計画性が強い者、自己中心的でわがままである態度が強い者は少ないこと。②家庭機能の凝集性については、家族との情緒的繋がりが全体的にやや高い家庭が多いこと。③家族機能の適応性については、家族の危機や発達の危機があった場合、家族システムや役割関係を変化させることに特に他と比べて優劣の差がないということ。

4. 傍観者の性格特性と家庭環境について

①傍観者の性格特性には、消極的で他人の目を気にする者が多く、他人に対して批判的な者、打算的で計画性の者、自己中心的でわがままである者は少ないこと。②家族機能の凝集性については、家族との情緒的繋がりが全体的にやや低いということ。③家族機能の適応性については、家族の危機や発達の危機があった場合、家族システムや役割関係を変化させることがやや低いということ。

4. 今後の課題

本調査から、いじめっ子、いじめられっ子、観衆、傍観者の4層についての性格特性並びに、家庭環境の関連について検討してきた。それぞれの性格特性には、家庭環境の影響から形成されていると考えられるものがあり、家庭全体の在り方や親子の繋がりに関して改善の余地があると考えられた。特に現代は女性の社会進出や少子化の影響により、一家団欒の場というものが激減しているように感じられるため、如何に限られた少ない時間の中で、家族とのコミュニケーションをはかれるかによって、家族全体の繋がりが、さらには家族全体の機能や絆を深めることとなるであろう。またこれらのことにより、子どもにとって家庭という場が安全かつ安心できる場であることを認識させることが必要であると考えられる。特に現代のいじめは、ネットいじめや集団的いじめなど、ゲーム的な感覚でいじめを行う者が多く、誰もが標的となり得る状況であり、巧妙な手口によって大人たちには見えないような所でいじめが発生するケースが多い。そのためにも、親や教師は子どもの変化にいち早く気付けるような体制を取ることが必要であり、さらには専門機関との連携、地域の方々との関わりが大きな役割を果たすと考えられる。